



TITLE:

# 附属図書館のあり方

AUTHOR(S):

---

CITATION:

附属図書館のあり方. 静脩 1966, 3(5): 4-5

ISSUE DATE:

1966-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36368>

RIGHT:

## 附属図書館のあり方

○

前田 昇 三

おとなりの台所の様子を、比較的良好に理解しているものが、編集者の依頼とはいえ、「要望」として次の事々をお願いするのはよくよくのことである。ぜひ手じかなものから実現のために積極的な努力をしていただきたいものである。

その一つは、部局図書室で受入事務を終えた図書資料は附属図書館に持ち込まれ、附属図書館としての整理業務が行なわれているが、その整理に要する日数は、数旬を必要とするらしいが、学術情報の迅速化が叫ばれている昨今、図書整理期間の短縮化を願い、本館としての機能を十二分に果たして、利用者に迅速、適確な情報を伝達する業務を拡大されることを要望します。

つぎに、研究者がときたま必要とする辞書、辞典等のすべてを所属機関で整備することは種々の困難をとまらう。このような参考図書を附属図書館で、できうる限り多様に収集することを、附属図書館業務の一つの柱とされることを望みます。なお、所蔵参考図書の目録の編集・出版をはかり、既存の参考図書が十二分に利用できうようにしていただければとても便利と考えます。

もう一つのお願いは、附属図書館で月々到着する図書資料、また新しく受入された雑誌についてのインフォメーションを考えていただきたい。できれば“静脩”の一部として新着図書・資料、雑誌欄を編集して、案内するのも一案かと思えます。

このような「要望」をかなえていただくには、人手不足とか予算僅少等がネックになることと考えますが、「要望」の一つ一つは附属図書館での大切な仕事ではないかと思われますのでこれらがぜひとも実現されることを期待します。

(経済研助手)

○

沢 居 紀 充

次のような意味でネット・ワークの中心としての仕事を進めてほしい。

### I. <図書館学の研究組織の中心として>

図書館学研究室を設置し、

- ①部局図書室間の整理・奉仕にわたる技術进行交流し開発する。
- ②技術的な提案、学問的な研究、それらを実際に生かすシステムを作るための運動の拠点となる研究誌の発行。
- ③図書館学資料の core collection を充実させる。
- ④図書館員自身が、図書館員自身のためにインフォメーション・サービスを実験し、得られた成果を各部局で応用する。

### II. <文献の相互利用の中心として>

- ①全学の蔵書構成を明らかにする。
- ②ユニオン・カタログ(カード)室に専任の職員を置き利用案内を充実する。
- ③冊子目録の刊行、受入目録の収集、刊行。

### III. <情報奉仕の中心として>

- ①一般参考図書を系統立てて収集する。
- ②各部局図書室で subject bibliography を調製するための援助を行なう。

具体的な要望はたくさんあるが、今最も必要なことは、学内の図書館員相互のパイプの通じをよくして、仕事や蔵書や情報に至る道筋を常に風通しのよいものに保つ上で本館がリーダーシップをとって、諸提案が速かに実現されるように各方面へ働きかける組織の中心となることである。この点から、図書館学研究室の設置を特に望みたい。これが無理なら各部局で予算を分担し、図書館学の core journal を収集し、記事索引を作成することなどを通じて、研究室の設置にまで至る活動を組織することからでも始めていただきたい。

(経済学部図書室)

○

A. K.

附属図書館の部局図書の登録、整理事務に追われている現状を見て、登録のあり方と併せて中央集権化を急ぐ附属図書館のあり方を考え直して見たい。附属図書館の受入掛から週1回ぐらい各部局へ登録に必要なものを持って出張するとか、時間と手間を出来るだけはぶくよう考えてほしい。現在附属図書館が果している役目、登録と全学の図書カード検索が出来るということに重点を置き、事務範囲を縮少してはどうか。つまり、図書

カードの検索とそれを助ける参考掛と受入掛と、貴重書あるいは dead book の所蔵、保管、閲覧に限ってはどうか。(教養部図書室)

○ 中 本 誼

一般に図書館という所は、ひんやりしてどこか殺風景で、外の世界と、きっぱり離れているようです。でも、ぼくの高等学校の図書室の窓ぎわは、庭に面していて、僕の一番好きな所でした。春は、新緑や蝶に目を休め、秋は、金木犀の香と、自然界に面していたからです。本学の図書館も、もっと自然を取り入れてはどうでしょう。そうすれば、他では、味わえない楽しさができて、一層すばらしいものに、なるのではないのでしょうか。

(理学部2回生)

○

附属図書館は数多くの困難な問題をかかえている。図書館への期待と批判の声はしばしばきか

れるが、それに対する改善には従来から本館としてもできるだけの努力はして来たとし、今後もしようとしている。しかし仕事量の著しい増大に比し、人員の過少と財政面の窮乏は大きな障害となって図書館にのしかかっている。曲がり角にきている本館のあり方についてよせられた数々の意見は、至極もつともと思われる。本館としてもこれにこたえるため、種々の制約はあるが、環境の整備や情報活動も、可能なことから一つずつでも実現したい。しかしながら素手では結局縫策に終るのを憂える。知識のソースだといわれながら、それほど重視されていない図書館、改善への努力は図書館にのみ負わされてきたが、あるべき姿の京都大学図書館の実現は、単に図書館だけの努力で達成できるものとは考えられない。館員として一層の努力を惜しまぬとともに、背後に大学当局はもとより、全学の各層の深い理解と支援を期待する。(編集部)

○ 「富士川文庫・本草関係図書」医学図書館および薬学部図書室へ移される

久しく本館に所蔵していた標記図書は、医学関係の図書は医学図書館への趣旨と、当該部局の要望に基づいて、今回それぞれへ移された。富士川文庫 9,017冊は医博、文博故富士川游氏の旧蔵書で、大正7年本館に寄贈された医学史関係の豊富な資料である。日本医学史の著者富士川博士の面目をしのぶと共に、和漢医学および日本医学史研究に不可欠のものとして、ひろく学外にも知られその利用も多い。医学図書館では来たるべき利用に備えて、整理、配架など準備に多忙である。

本草関係図書 2,043冊は本学農学部教授故菊池秋雄博士の旧蔵書がその大部分を占めている。これは他の園芸、植物などに関する多量の蔵書と共に、昭和29年以来本館に収蔵されていたが、今回薬学部図書充実のために本草関係のものが移動された。同図書室ではすでに配架を完了し利用を待っている。ちなみに菊池博士が和梨(二十世紀)の品種改良育成に貢献されたことはよく人の知るところである。

○ フランス学位論文到着

パリ大学と本学との間の交換図書として、自然科学系を主とする(希望により法・文系も可)学位論文が、1959年より年1回定期的に150~200冊ずつ送られてくる。今年度は去る11月、Paris, Lyon, Strasbourg, Lille, Grenoble, Poitiers, Dijon, Besançon, France 9大学の論文205冊が到着、関係部局へ分配された。その内訳は次の通り。

理 47, 法 28, 医 24, 経 9, 農 1, 化研 27, 日本物理化学研究会 69.

○ 本館所蔵資料の掲載書寄贈される一「甲子兵燹図・天王山十七士忠死之図」一

この二つの図は尊攘堂遺品として、本館に所蔵する維新史料である。去る11月世界文化社刊行の日本歴史シリーズ17「開国と攘夷」(P. 29, P. 55)中に挿図として掲載されたので、その1本が同社より本館へ寄贈された。このように本館資料を利用しての出版物は、寄贈されるたてまえになっているので、今後そのつど紹介することとしたい。